

切韻解題二章

三 沢 諄治郎

▽左の二章は隋唐韻書の或る混雜する問題について解說的に整理して述べたもので、それらの書の内容など専門にわたる部分にはできるだけ深入りせぬよう心がけた。

(一) 呉彩鸞筆の「切韻」「唐韻」

明末清初の大学者顧炎武の「音論」に、周公籀(南宋)の「靈烟過眼録」を引いて、

○呉彩鸞の書きし切韻一本、その書は一先・二仙を廿三先・廿四仙と爲す云々。

即ち、当時普通の韻書では平声を上下に分け「上平」は一東から廿二山まで、「下平」は一先・二仙という順序にしたのを、呉彩鸞筆と伝えられる切韻では「上平・下平」を連続して廿三先・廿四仙としているというので極めて異例な韻順の示し方であることを記述している。

この呉彩鸞筆と伝えられる韻書は、常識的には、呉彩鸞という女士が筆写したもので彼女が韻書そのものを作成したわけではないと解せられ、その点では別に疑問をさしはさむべき余地はないようだが、とにかく色々な問題を包蔵する書と云わなければならぬ。

呉彩鸞筆という韻書は宋、元の頃には可なり流布していたらしく、前記周公籀の取り上げたものの外に、魏了翁(南宋、鶴山と号す)もその鶴山集に記述している。即ち錢大昕(清)の「十駕齋養新録」(卷五・七丁ウ)によると、

○魏了翁、呉彩鸞の唐韻に序して云ふ。

と云つて次の四項目の特異な点を挙げてゐる。此処でわれわれは、同じ呉女士の筆だが、これは前掲の「切韻」ではなくて「唐韻」であることを意識して置かねばならない。その四項目というのは、

(A) 韻の序列が廿八刪・廿九山・三十先・三十一仙という風にな

っていて「上平」「下平」を区切っていないこと。

(B) 現行の韻書と比較して韻母の排列が大分違っていること。

(C) 「移」外一字の二小韻を特に一部の韻類として建てていること。

(D) 一東の下に、

○德紅反、濁、満口声。これより三十四乏に至るまで皆然り。
と注していること。

而して今日では周公謹の切韻も魏了翁の唐韻も現物が残っていないので詳細は不明だが、当時、韻書の上に色々な手が加えられていたであろうということは、右の条々からも察せられる。

韻書の名にしても「切韻」と「唐韻」となっているが、内容にどれほどの差があったのか明らかでない。もともと隋の陸法言以来、固有名詞としての「切韻」というものがあつたのだが、韻学が盛んになるにつれて、それが韻書一般の汎称となり、その汎称のうちで又特に孫愐(唐)の「唐韻」という新しい固有名詞を生んだと考えられるので、韻書内部の異同を詳しく比較した上でなければ両書が同じ書か異なつた書かは断定することができない。

所で、右のように特に筆写者の名を冠して伝えられるに至つたのは、次のような特殊な伝説が世に行われていた為であろう。此の伝説はいろいろな形で色々な書に取り入れられているが、今、これを

総合的に述べて見ると、

①呉彩鸞は二十四孝で名高い晋の呉猛の女である。

②呉猛は予章(山西省)の人で字を世雲といつた。孝行を以て聞え夏日に蚊を払わなかつた。逐われた蚊が去つて親たちを刺すことを恐れたからである。

③呉猛は四十才の時、至人丁義から神方を授けられた。故国へ帰ろうとして道を急いでいると、大河の風波が急に高くなり舟を雇う暇もない。その時、猛は白扇を開いて江水を扇ぐと河水が二つに分かれて徒歩で涉ることができた。これを見る者皆驚嘆した。

又、当時晋の重臣庾亮が江州(九江)の刺史となつていたが急な病氣を發して困つていた。呉猛の評判を聞いて之を迎え、己の病のことを尋ねた。すると呉猛は、自分は今や命数が尽きて死期が迫つているので他人の病を判定することが出来ませぬ、願わくば棺と葬衣とを与え下さいと答えた。亮がこれを与えると、幾日もたぬうちに猛は死んでしまった。然るにその形状はさながら生けるが如くであつたので郷人たちは不思議に思い、まだ本棺に入れぬうちに棺の蓋を開いて見ると、呉猛の屍は消え亡せていた。人々はこれを見て、庾亮のためには凶兆であろうと噂し合つたが果して間もなく亮は死没した。

④世に呉猛を呼んで呉真人君といつた。

⑤ 吳猛はその女と共に白鹿に乗って天上界へ去った。又一説に弟子四人と共に昇天したとも伝えられる(大明一統志)。

⑥ 吳彩鸞は自らを吳真人の女と云い、父の秘法を伝えて仙術を心得ていた。但し、吳猛は晋代(二六九—四一九)の人、彩鸞は唐の太和(八二七—八三五)の頃の人であるからその間にざっと四百年以上の差がある。それについては、彩鸞が一旦父と共に天上界へ昇ったが、天機を洩らしたという隙により再び地上に降されたのだともいう。

⑦ 唐の太和の末に進士文籍という者が洪州(江西省、南昌の古名)に寓していたが、或る時、鍾陵西山(江西省)の紫極宮に於いて因らずも彩鸞と相識り、共に連れ立って帰った。然し窟は貧しくて妻を養うことができなかつた。そうした時、彩鸞は孫愜(唐)の著した「唐韻」を筆写したがその速筆飛ぶが如く、一日一夜に全篇を写了し金五緡に代えて生計に資し、尽くれば又筆写して生活費に充てた。

⑧ かくすること十年、その後二人はおのおの一匹の虎に跨り粟王山を越えて西山の奥へ姿をかくした。今に粟王山には二人昇仙の処という「仙虎跡」があるという。

唐韻全篇(五卷)を一日に写了したという速筆ぶりについては「書面筋」に惟松雪堂翁という速筆家が疾書して一日僅かに三万

字、吳女士の唐韻一部は約十万字を下るまい云々とあり、而も吳女士の字は美しい蠅頭小楷で、そのために「式古堂書面彙考」の書部に採り上げられているのである。

右のように多分に伝説味の加わっている女仙の筆写したものでいうので珍蔵せられ特に書名に冠して「吳彩鸞筆」といったのである。

○永春(清)の「式古堂書面彙考」(書巻六八)には此の書に「唐女仙吳彩鸞楷書四声韻帖」と題し、孫愜の「唐韻序」および平上去入別の韻数・葉数を掲げ、

終りに

○唐韻一部

元和九年正月三日写 吳王本

とある。吳王本については解し難いが(或は吳女士の仮名か)、四声韻帖の注に

○徽宗御書の籤題の韻帖、すべて六十葉、每葉面背俱に書す。

即ち北宋の徽宗皇帝親書の題箋がある韻書という意であろう。彙考の末には又重ねて、

○宋徽廟秘府收藏、唐女吳彩鸞小楷の書、唐韻一部。

と記し、吳彩鸞の筆蹟であることを審定した鑑書博士柯九思(元)の識語がある。

次には柯の友人虞集(元)の筆に成る「呉仙写韻軒記」があり呉女仙の韻書を写した旧宅が今に存することを述べている。

その次の行に、明末の蔵書家として名高い項子京(墨林山人)の蔵書印があるので、この呉彩鸞筆写本を「項本」(王国維、觀堂集林)或は「項子京本」と呼んでいる。

前にも述べたが、呉女仙筆の韻書は此の他にも相当流布したものと見え、虞集の「写韻軒記」によれば、

○予、昔、圖書の府及び好事の家に在りて往々其の写せし所の唐韻凡そ三・四本を見たり、云々。
ということである。

又、この彙考の末に外録(外録とは参考の意か)として張特義という人の蔵する彩鸞書「切韻」の名を附記しているが、それによると、

○按ずるに、彩鸞隱居して鍾陵西山の下に在り、書きし所の店韻、民間に有ること多し。余が見し所は凡そ六本、云々。

これらの記事から見て、呉彩鸞筆と冠して伝えられた切韻・唐韻が珍重せられた情況を知ることができよう。時に項子京本には六百二十金という時価さえ記されている。

呉女仙は韻書ばかりでなしに「玉篇」を写したとも云い(元の陸友、研北雜志)、又、「仏本行経」(六十卷)を写したとも伝えられ

る。尤も後者には異論もある。

以上、いろいろと述べたが、王国維は韻母の扱い方から推して

○呉女士筆の項本「唐韻」は唐開元二十年の初稿本唐韻であろうとした。この総韻目は百九十五韻。

この外に、内容は明らかでないが、前掲の、

○魏了翁蔵の呉女士筆「唐韻」。

○虞集の見たとする呉女士筆「唐韻」三本乃至四本。

○張特義という人の親た呉女士筆写「唐韻」およそ六本。

又、切韻の方は、

○靈烟過眼録に引かれた呉女士筆「切韻」

○張特義所蔵の呉女士筆「切韻」

などがあるわけで、時には切韻と唐韻とを混同して云っている如きところもある。これは前にも述べたように、汎称と特称との相関々係によるものと考えられる。特に呉彩鸞筆の「唐韻」というのは書画道の方から甚だ珍重せられたらしく、広く識者・好事家の間に知れ渡っていたようである。

○

さて、近年になって唐代の切韻として「王仁昫切韻」の第三種本が出現したことは甚だ劇的な事柄である。すでにその第一種本(王)一)は敦煌の箱中からペリオ(仏)によって世に紹介せられ、第二

種本(王三)は清室の内府に在つたのを羅振玉・王国維の手によつて発見せられたが、何れにも缺損亡佚の部分があつて「切韻」の完本は見られなかつた。然るに世界大戦の後になつて唐蘭氏たちが市中の書肆で完本というべき第三種本を発見したのである。今では専ら「王三」という簡稱で呼ばれている。

その発見の始末について唐蘭氏の跋文から拾うと、大よそ次のようないきさつになる。

○戦勝の第三年に、溥儀がもち出した国宝で、兵火の余に漸く商人の買集めによつて故郷に戻つて来たものがある。或る日、友人の于思泊君が私に呉彩鸞筆の「唐韻」を見せようといふので同伴を約し、さて巻を展べて見ると、何と紛れもない宋跋本の「王仁昉刊器補缺切韻」の全帙である。思いがけぬ発見に全く吃驚した。(中略)所が書肆の要求する値段がべらぼうに高くて手も足も出ない。(中略)翌月になつて馬叔平先生が京師から帰来されたので、早速購入方をお願いし、そこで故宮博物院に復帰することができたのである。

この書には明の翰林学士宋謙の跋文があるので一名を「宋謙本」又は「宋跋本」と呼んでいる。この書はその後全巻を影印して世に頒ち研究者を喜ばせている。

この書の巻頭に添えた説明によると、

○是の巻は「石渠宝笈」(清、乾隆勅撰)に著録せられた原名が「唐呉彩鸞書唐韻」であるが、呉彩鸞の書たる確然とした拠り所がない、云々。

又、宋跋の跋文によれば、

○その真贋たること疑ひなし。余も東觀に於いて二本を見たるが、紙墨これと正に同じ。(中略)誠に希世の珍なるかな。と讃めてゐる。こゝにも「切韻」「唐韻」の混雜があり、又、多分に伝説的な呉彩鸞の筆として十分な確証は得られないが、書品の上から、これを肯定しようという感情が明らかに看取せられる。唐蘭氏の「王三」跋文においても、

○蓋し、唐宋以後、凡そ韻書を見れば、即ち之を彩鸞に属し、人の珍玩となり、反つて藉りて以て保存するを得たり。と道破している。正にその通りであらう。

(二) 武内本・重松本の「切韻」

⌞

「切韻」残片のうちドイツに在る若干を目睹し、之を写真にとり、或は模写して持ち帰った人が少なくとも三人ある。東北大学の

武内教授・九州大学の重松教授、それに中国の学者姜亮夫氏である。

始め、重松教授がドイツへ行かれたのは昭和八・九年の交で、欧州旅行をせられた時であった。次いで武内教授は昭和十年二月にベルリンへ行かれた。

重松教授はプロシヤ王立学士院を訪れ、ドイツの「トルキスタン探検隊」が一九〇二年から一三年にかけて前後四回に亘る学術探検で蒐集した古文書を、同学士院整理主任 Dr. von Gabain 女史（ウイグル語学者）に依頼して写真にとらせてもらった。ガバイン博士の言によれば、これらは Le Coq 氏が吐魯番（ツルファン）附近で蒐集したものであるとのことであった。

《2》

そのうちに含まれる小学関係の写真二葉は後に岡井慎吾博士の看る所となったのだが、その折のことに就いて岡井博士は次のように言っている。

○私は先程十日ばかり九大に出頭した。折柄その支那学研究室を中心として九州支那学会が創立せられて其の第一会合が催され、席上同大学の重松教授の「仏独両国に於ける支那学研究」の精詳なる御講演があつて多大に啓発せられる所有るに感謝したが、教授は錦上更に花を添ふる為、御将来の写真

数十枚をも見せて下さった。その中に小学に関するものが二葉あったので私は驚いて睥って居ると、教授は、それは参考の為に撮影して来たが自分の専門以外のものだから、研究するならば提供しようと云つて下されたので、私はその御言葉に甘えて借還した。

これは昭和十二年九月の「斯文」(26・6)に載った文の冒頭である。この二葉の内の一は「玉篇」、一は「切韻」刊本の写真で、世に重松本と呼ばれるにいたつたものである。

《3》

次に、東北大学の武内教授はベルリンに着くとすぐに、同じく学士院に赴きガバイン博士を訪ねてツルファン文書閲覧の希望を述べたのであった。武内教授は帰国後、東北大学の雑誌「文化」(2・7号、昭和十年七月発行)に「唐鈔本韻書と印本切韻との断片」と題して発表せられた。

右の文は直ちに天津の「益世報」読書週刊(二十六期)に訳載せられたが、その中の二葉(A)は次に述べるような事情で、前々から魏建功氏の手にある写真と一致したので、折柄編輯中の「十韻竅編」に組み入れられて「徳」という記号が付せられた。

武内教授の持帰られた切韻関係の写真は、

(A) 唐写切韻の写真 二葉(上声)

《B》 唐写切韻の写真 一葉（去声）

《C》 刻本切韻の写真 六葉（去声）

であった。

《4》

そのうち、前述の通り《A》の二葉は十韻彙編に採り入れられたけれども、《B》の一葉の写真は十韻彙編の完成までに遂に編者者の手許に入手できなかったので採り入れ得なかった。《C》の刻本写真も亦同様である。それ故、十韻彙編に「徳」と標せられたのは僅かに《A》二葉の分だけなのである。後に述べる重松本切韻も勿論採り入れられては居ない。

右に就いての事情の詳細は編輯者魏建功氏が十韻彙編に序した所謂「魏序」に依って知り得る。今その部分を略述すると、（私とあるのは魏氏である。）

○私は一九三二年に友人趙萬里君から唐写韻書の二葉の写真を見せてもらい、当時これを借受けて写したが、それが一枚の断片の両面であって、大体、上声、「止韻」以下の数韻であることを発見した。趙君はそれがドイツから来たものであることを知らせてくれただけなので、その原本が何処に現存するのか、何処で発見されたものか全く詳かにし得なかった。私はそれを書写したものを劉復博士に送って十韻彙編に入れ

て頂くことになったが、ただ、これがどういう韻書であるのか決定することができない。そのうちに十韻彙編の印刷が進行して速かに序を作らねばならぬ時になって、日本の武内教授の論文が発表せられ、それがドイツのプロシヤ学士院でルコック・グリウンウエーデル達のツルファン文書の中で見た二枚の唐写本韻書の断片であることを述べている。そして、その中の一枚は即ちわれわれの既に見たところのものとなり得た。そこで私は小川環樹先生の紹介を得て武内教授の好意により私のまだ見ていない方の一枚の断片の写真を送って頂くことができた。

右の、あとの一枚とは即ち《B》に当る。これは十韻彙編の本文の印刷には間に合わなかったため、魏序の中の第五八頁にその写真を掲出するにとどめた。

《C》については魏序に

○全部で六枚の写真で、われわれは之を一見することができなかったため、ここには武内教授の論文の叙述に拠る。

としているが、なお、武内教授との間に質疑の書翰が交されて居り、その内容も魏序（第五九頁）に詳しい。又、柱に「切韻」という文字の見える第二葉の写真が第六一頁に出ている。

《5》

重松本は前述の通り武内本よりも前に撮影將來せられたものだが、その発表はせられず、これ亦前述の通り九大で岡井博士の目にとまり同博士によって雑誌「斯文」に「重松教授將來の切韻及び玉篇の写真につきて」と題し発表紹介せられたのである。武内本（去声）と重松本（平声）との間には重複するところがなく前者は天地の低い中型本、後者は大型本と見受けられ、重松教授の直話では、五・六枚が一組であった云々（岡井博士論文に依る。）とある。以上のことを比較のため並記して見ると、

- 撮 影 昭和八・九年（重松本）
- 昭和十年（武内本）
- 発 表 昭和十年（武内本）
- 昭和十二年（重松本）

○魏序成立 昭和十一年（十韻彙編）
右のようなわけで、十韻彙編には武内本の《A》だけ（魏氏が以前からその写真所持していたので）が入り、《B》《C》については魏序の中で論及し、写真の一部を掲出したに過ぎない。魏序が重松本のことと触れていない事情も右によって明らかであろう。

《6》

次に、明確な年代は不明であるが、十韻彙編成立（昭和十一年

刊）の後に、姜亮夫氏の「瀛外敦煌韻輯」が出たが（恐らく昭和二十五年前後完成か）、それには武内本の《A・B・C》は勿論、重松本の写真も採り入れられ、それらについての解説もあるので、左に武内本・重松本の印影と論説との所在を記録して置こう。

○武内本

《A》 写本切韻（上声）

- 「文化」誌上に内容紹介（武内教授）。
- 「十韻彙編」に採入。
- 魏序五八頁に解説。

○姜氏韻輯（JWVK 75）卷三に手写本あり。

○又、附録として武内教授所録本あり。

○姜氏卷十二の一に所論あり。

《B》 写本切韻（去声）

- 「文化」誌上に内容紹介（武内教授）。
- 「十韻彙編」魏序中に写真を出す。
- 魏序中に解説あり。

○姜氏韻輯、卷三に武内鈔録本あり。

○姜氏、卷十二の一に所論あり。

《C》 刻本切韻（六葉）

○「文化」誌上に内容紹介（武内教授）

○竊編、魏序中（五九頁）に解説あり。

○姜氏韻輯、卷十七に論あり。

○姜氏卷頭に第一・第二葉の写真あり。

○姜氏卷八に六葉全部の模本あり（二二二—二二五丁）。

○第一葉・第二葉 姜 JIDI a1. a2。

第三葉 " b

第四葉 " d

第五葉 " c

第六葉 " b

○重松本（一葉）

○雜誌「斯文」に内容と解説。

○姜氏韻輯、卷頭に写真あり。

○ " 卷六（一〇五頁）に模本。

○ " 卷十五ノ三に詳論あり。

なお、この件については其の後の研究発展もあらうと思うが、今は以上の範囲にとどめる。もし誤謬の点などあらば大方の御教示を乞いたい。